きっとつながる。吉都でつなぐ

ACTION

立ち上がる人々

100周年を地域全体で祝おうと、
立ち上がった人たちがいます。
彼らの思いは「小林市を盛り上げたい。
ずっと吉都線を残したい」
その純粋な思いは、大きな力となり、
小林市に新たな風を吹かせています。

1

4

2

3

Interview

ロゴマーク、キャラクターを考案
家具のきむら社長
木村洋文（きむらひろふみ）　さん

ロゴマークは、これを機に人々や場所がつながってほしいという思いで円形にし、霧島連山をバックに列車というデザインにしました。列車が前に飛び出すようなデザインは、過去から現在、未来へ進むことをイメージしています。このマークをさまざまなところで目にして知ってほしい。そして、小林市に住む皆さんに吉都線を愛してほしいと願っています。また、沿線自治体が一体となって100周年が盛り上がればと思います。

吉都線100周年記念事業ロゴマーク

6

5

1 商工会議所の屋外倉庫に壁画を描いた小林高校美術部 2 小林駅周辺で清掃作業をする実行委員 3 毎週、毎晩のように開かれる実行委員会の会議 4 市内のイベントでは、特製うちわを手渡して100周年をPR 5 ポスターやのぼりをデザインした小林秀峰高校の生徒 6 8年ぶりに復活した土曜夜市

年齢、性別、職種を越えて盛り上げる100周年

100周年を盛り上げようと集った有志、約50人。彼らは「JR吉都線100周年記念事業小林市実行委員会」。メンバーは老若男女を問わず、鉄道愛好家や会社社長、NPO団体の会員など多彩な職種の人たちです。

皆さんは、のぼりやポスターを見かけたり、うちわをもらったことがありませんか。彼らは、イベントがあるたびに足を運び、元気にPRしてきました。そこには、みんなで100周年を祝いたい、これを機に小林市をもっと元気にしたいという思いが詰まっています。

彼らの熱い思いは、多くの人や団体を引きつけ、さらに大きな力となっています。そして、10月1日の小林駅開業100周年を皮切りに、吉都線を、小林市を一緒に祝い、盛り上げようと、より大きな声で私たちに呼びかけるでしょう。

小林商工会議所の屋外倉庫の壁にある鮮やかな壁画。100周年を盛り上げようと、小林高校美術部が描いたものです。描いた同校美術部の下別府佑帆（しもべつぶゆほ）さんは「壁画を見て、吉都線に感謝の気持ちを抱いてもらえれば」と話していました。

また、市内各所で見られるバラエティーに富んだのぼりやポスター。小林秀峰高校の生徒26人がデザインしました。吉都線で通学する生徒もおり、これまでに感謝し、これからもずっとあってほしいという気持ちが込められています。

Interview

撮り鉄（とりてつ）歴10年
鉄道写真家
石神義男（いしがみよしお）　さん

もともと風景写真を撮るのが好きでした。ある日、何気なく人吉駅へSLを撮りに行ったときのことです。SLが来た瞬間興奮し、写真は失敗。以来、撮り鉄になりました。撮影は、場所と構図を決め3、4時間ひたすら待つ。シャッターチャンスを逃さないよう、列車が通過する約3秒間に全神経を集中。その時の緊張感はすごいものがあります。私は、風景に鉄道を入れた構図が好きです。吉都線は、霧島連山と四季折々の美しい風景が撮れる路線だと思います。撮る以外には、家族や友人と吉都線を利用して出かけることもあります。車窓を楽しみ、着いた先でも楽しめる。ですから吉都線は「見てよし、乗ってよし、撮ってよし」の素晴らしい路線だと思います。

石神さんならではの美しい風景と鉄道が組み合わされた構図の写真

癒やし系シンガーソングライター
大野勇太（おおのゆうた）　さん

「きっと～会いに行くよ～」。さわやかな声と軽快なメロディー。小林市出身のシンガーソングライター大野勇太さん（大阪市在住）がJR吉都線100周年を盛り上げようと作詞作曲しました。タイトルは「吉都線～夢をのせて～」。沿線の駅名や車窓からの風景を歌詞に取り入れ、ポップな曲に仕上げました。大野さんは、高校3年でギターを始め、市内で路上ライブを敢行。卒業後、歌の道を選びました。これまで故郷などを題材にオリジナル曲を100曲以上作成。学生時代は通学に吉都線を利用していたという大野さん。知り合いから吉都線100周年を聞き、歌を作ろうと思い立ちました。「青春時代の、たくさんの思い出がある」と思い入れを語ります。帰郷した際に吉都線に乗り、歌詞ができました。そして「みんなで盛り上がれる曲を」と曲を作成。「吉都線に乗りたいと思うきっかけになれば」とライブのたびに吉都線100周年をPRしています。「地元を大事にしながら、活動する舞台を大きくし、宮崎を代表する歌手になれたら」とトレードマークの笑顔で夢を語りました。

土曜夜市（駅前通り）でイメージソングを歌う大野さん